

ボタン

牧 幸 男

ボタンは、なんとなく不思議な精気を感じる植物である。貧弱な木に豪華な大輪の花を咲かせる秘めたる力、また寒風が残る早春、紫色に朱をこめた芽を出し始める生命力の強さに感心するからだろう。花の花期は、東京付近では四月中旬であるが、春の訪れが遅い長野市付近では五月になってからである。初夏が近くなり木々の新緑が少しずつ色を増す頃、すばらしい花に接することができる。9月頃になると落葉して休眠状態になる。



ボタンの渡来は、奈良時代(710~794)の^{しょうむ}聖武天皇(701~756)の頃、僧空海(774~835)が中国から持ち帰り、植栽したのが最初とされている。当時は薬用植物として珍重されたが、豪華な美しい花が咲く姿から観賞の対象になった。しかし、記録上で、『万葉集』(629~759)、『古今集』(914頃)、『金葉』(1126)などの勅撰集には牡丹の花は詠まれていない。牡丹の最初の記述は藤原忠実(1078~1162)著^{しかかしゅう}『詩花和歌集』(1152)に「咲きより散り果つるまでみしほどに花のもとにて20日へにけり」とあり、二十日草と呼ばれていた。また、『枕草子』(1001)には、143段では「露台の前に植ゑられたりけるぼうだんの辛めきおかしこと」の記述もある。当時、牡丹は以前の梅と同様、王侯貴族、武士、僧侶など上流階級に大切にされていた。一方、^{せんでんしゅう}生け花には早くから利用されていたらしく、『仙伝抄』(成立年代不明)や『池坊宣応口伝』(1545)に牡丹が記述されている。

原産国の中国でも当初は、観賞用でなく、薬用植物の利用であった。観賞用に栽培されるようになるのは中唐(713~766)の頃からである。当初は牡丹の花は小さく、色も紫赤の系統だけで、決して高級な花ではなかった。しかし、その頃から単に花といえばボタンを指すようになり、満開の時節ともなれば、貴賤を問わず、牡丹を中心に遊樂にふけたと記録が残っている。また、北宋の詩人^{そとうば そしよく}蘇東波(蘇軾)(1036~1101)は「牡丹を見るのは、巳刻(午前10時)宜し巳より後は開き過ぎて花の精神衰えて力なく麗しからず、午の刻(正午)より後に見る牡丹は知らざる俗客なり」と観賞法を記録残している程である。その頃から、品種改良も進み、花の色は淡赤、真紅、紫色、暗紅

色、黄色など多様になり、更に、花の大きさも直径15~25 cmの大輪も生まれるようになった。わが国では、江戸時代になってから牡丹の栽培熱が高まり、栽培の参考書である『紫陽三月記』(1691)が出版されるなど、その熱は高まった。その頃、ドイツ人ケンペル Engelbert Kämpfer(1651~1716)がこの花をヨーロッパに紹介した。幕末から明治にかけて日本産の苗はヨーロッパに沢山輸出され各地に広がった。

ボタンが詩歌の対象になるのは、江戸時代以後で、花の姿、散りぎわの見事さなどに昔から多くの歌人に詠われてきた。

君に似る 白と真赤と 重なりて 牡丹散りたる 悲しきかたち 与謝野晶子

くれないの 大きな牡丹の 咲く見れば 花のおほきみ 今かかがやく 斎藤茂吉

虹を吐いて 閑かんとする 牡丹哉 与謝蕉村

侍が 傘さしかける ぼたんかな 小林一茶

植物名は、漢名の牡丹の音読みで、春に芽が雑々しく出るから、盛んな意味として牡を当て、中国では丹色(赤)を上乗としているので、

丹の字を用いたのが由来である。別名は、花王、木芍薬、花神、宝相花、貴客、百両花、富貴花、天香国色、洛陽花、廿日花、名取草、深見原草など多く、いずれも風雅の名が生れている別名の「花王」は、李白(1518~1593)が、あらゆる花の中で牡丹が第1、芍薬が第2と述べているのが由来である。また、英語では male(男性)peony、芍薬を female(女性)peony である。

学名は、Paeonia suffruticosa で属名はギリシア神話の医神 Paeon に由来する名で薬用にするため、種小名は低木の意で樹木の姿による。

薬用は、『神農本草経』(250~280頃)の中品に記載されている生薬である。根の皮を生薬名

牡丹皮と呼び解熱、鎮痛、消炎、月経不順などに用いる、我が国では『日本薬局方』に記載されている。

食用は、花卉を、サワードリンクやエディブルフラワーに利用。

応用は、以前は、種子による栽培のため、非常に高価な植物であったが、戦後になり芍薬を台木にする接ぎ木が確立したので普及が急速に進行した。また、牡丹と芍薬はともに美しい大

輪 豪華な花から「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と良く口にする
が、座りばなしばなしで、血行が悪くなりがちな状態(瘀血)を改善する意味合いも含んである。

猪肉の「ぼたん鍋」の名称は、肉の赤色が牡丹の花に似ていることによる。

花言葉は、「王者の風格」「富貴」「恥じらい」「高貴」「壮麗」である。

